

底辺を広げる

トップに聞く

Series 企業 Report
Vol.35

株式会社栃木サッカークラブ 代表取締役社長：中津 正修

J1を目指す!!

就任後の記者会見で「Jリーグへ参入した以上はJ1を目指すのが絶対条件」と明言する。もちろん今すぐというわけではない。「ステップをつひとつ上から下といけない」とし、概ね4年後を見据える。

J1に昇格するためには、まずJ2で3位以内に入ること。「強いだけではダメ。観客数2万人以上を収容できるスタジアムが必須、財務面も充足させない」と。今季好調の栃木S.C.は、11戦無敗を記録。一時は暫定4位に浮上、「ひよとしたら」とサポーターたちに熱い期待を持たせた。しかし、中津社長は「上位チームはJ1で戦ったチーム、実力の違いを感じる。いったん昇格したら、その座を継続することが重要」と冷静に受け止める。

そのためには、クリアしなければならぬ課題が山積する。「どういうチームにするかという長期ビジョンを描き単年度の目標を設定。それに対しての現実をきちんと分析し、そのギャップを埋めなければいけない。現実をよく見ると、問題点の真実が見えてくる。それを一つひとつ潰すこと」で企業経営のノウハウを活かした様々なアイデアや

大きなシナジー効果を生む

具体的行動計画を着々と進めている。

W杯を見てわかるように、サッカーは、地域に番着しているスポーツ。経済的シナジー（相乗）効果が高いと言われている。しかし、栃木S.C.の存在はまだまだ浸透しておらず、「まだまだ県民への広がりは薄い。県民の総意を集めたアルビレックス新潟を見習いたい。県民に好かれるチームになるためにも、小さな感動の積み上げこそが大切。そうすることでリピーターが増え、大きな経済効果を生み出す。そのため何ができるかを考えなければならぬ」と熱く語る。

「確かに、グリーンスタジアムは便利な場所とは言えない。シナジー効果をあげるためのスペースも十分ではない。しかし、与えられた環境の中で最大のバフォーマンスを考えていかなければ。アクセ環境を整えるとか、スポンサー企業のブースを設けるとか、イベントとコラボするとか」と意欲的だ。勝つて

Profile 中津 正修 (なかつ まさし)

4年間の監査役を経て、新井賢太郎前社長の任期満了による退任で、今年4月27日に現職に就任。トヨタウッドユーホーム株式会社代表取締役社長でもあるため、非常勤としてその任に当たっている。1948年生まれ。71年4月大成建設(株)入社。75年10月宇都宮産業開発(株)(現トヨタウッドユーホーム(株))入社。92年4月(株)ユースケー(現トヨタウッドユーホーム(株))代表取締役社長就任。現在、社団法人栃木県経済同友会副代表幹事、社団法人栃木県住宅協会会長、宇都宮市起業家育成支援施設(愛称:宇都宮ベンチャーズ)会長、宇都宮まちづくり会議会長など要職に就く。

め、多分野の人材で構成する経営サポート体制を広げる。サテライトオフィスの設置で情報などへのアクセス開口を広げる。ワーキンググループをつくりボランティアの底辺を広げる。次から次へと、様々なアイデアが生まれる。それは、一人でも多くの人に参画してもらうため。そして、目指すは、栃木県ならではのオンラインチーム。

そのためにも財政基盤強化は不可欠。今回の人事は経営や管理に理解の深い「オール栃木」で構成され、スポンサー収入増が期待されているが、入場者増や後援会組織の強化、グッズの販売などで小さな額でも県民一人ひとりの支援を訴える。そして、行政との連携も重要で、佐藤栄宇都宮市長や福田富一知事との距離が近いとされている同氏に期待もたれる。

一人でも多くの人に参画してもらうためのシステムづくりは、今まで携わってきた「まちづくり」でのノウハウを活かした、ネットワーク作りともいえる。

一人でも多くの人に参画して欲しい

「企業での35年の経験と比べて、サッカークラブの経営の難しさを今感じている。人間の力で物事を進める奥の深さ。学ぶことも多い。でも、可能性は相対している」と。そして眼を輝かせて「面白い」とも言う。かつて本誌のインタビュー(07年7月号)で「人生は人の行動の結果。経験を積み、学び、挑戦することを意識している」と語り、「死ぬ時は笑って死のう」と、やりたいことをめいばいやるというポジティブな生き方を示す中津氏。4年後、われら栃木S.C.が、どこまで成長しているか楽しみだ。その成長を、ひとつ残らず見守るためにも、グリーンスタジアムに1回でも多く足を運びたい。

「今は、市民権を得るための土台づくりの時」。そのためのキーワードは「底辺を広げること」。ジュニアやユースの育成など選手の底辺を広げる。後援会やファンクラブを立ち上げてサポーターの底辺を広げる。経済界を始